

# 赤毛のマリー&キラキラ玉

## エイドリアン・奏

### 花と虫

女坂を男が歩いている。下駄をはいて。ちび、でぶ、はげの中年男だ。オーラが出ている。緑色の光だ。彼は独り言を言っている。

「かんじざいほさつ。光の中に闇がある。アーベル群（数学の定理）の対称性の中に答がある。諸行無常の響きあり……なんまいだあ〜」

その横をピンクの光が通り過ぎた。長身の美女だ。ポニーテールの赤毛が燃えている。

二人は目で合図をした。少女は、こう、つぶやいた。

「坊主、お経唱えて、金なし。女なし。チーン」話はこうだ。

美女は立花ジェニファー・マリー。白雲なびく駿河台にあるM大の3年生。神宮の六大学野球に出るクラブの一員。メンバーといっても、世話係のマネージャーではない。異色の中継ぎ投手の控えという存在だ。1年と2年のとき、2回試し登板したが、減多打ちにあった。再起をかけて、トレーニングのため、この坂を走っているという訳だ。混血のパター味の美少女だ。髪はレッド、目はブルー。頭は？ 中の上？ 上の下？ まあ、そんなところだ。

ちび男の名前は姫野一男。なかなかの努力家だ。大分の進学校をそこそこの成績で卒業して、東京のM大へ進学。晴れて、イギリスのサリー大学へ留学。まずは語学学校で2年みっちり英語を勉強した後、修士へ。英検2級で大学院に申し込みをしたら、「おととい来い」と拒否されたので、しかたなく英語を磨くことになったのだ。理系修士をとるのに3年を費やした。その後ロンドン大学LSE（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス）で1年研究員として働いた。再びサリー大学へ戻って哲学修士となる。哲学修士となるのに7年もかかった。血と汗と涙の結晶だ。7年もかかったのは、学校創立以来最長だ、と指導教授たちに笑われたが、実は十一年もかかった人がいたことが判明した。IRA（アイルランド解放軍）の戦士だったという噂だが、そんな人と比較されても困ると、苦情の手紙を大学記録係にだしたら、「あんたはNIPPONのサムライではないか？」と逆ねじを

食らってしまった。英国人のアイロニーだろう。今は何をしてるかって？　ここ母校M大の専任講師だ。担当は心理学と統計学だ。その筋では、割と、良く知られている。奇抜なセオリーを提唱する、変人として。マリーは、その姫野一男のゼミ員だ。

本物は？

七人の猛者が集まっている。ここは姫野ゼミの教室だ。環境心理学という一風変わった科目だ。

「センサー。文系のほくたちが、理工工場でつくる製品の不備を見つける、というのは、どうでしょうか？」

吉田が切り出した。副ゼミ長でクールな現実派だ。神奈川県にあるS産業は、スマホなどのICチップを大量生産している。そのプリント基板が断線をおこすので、その原因を調べてくれないか、と姫野講師は相談を受けたのだ。伯父の中小企業診断士を通じての依頼だった。これをゼミの卒業テーマにしようという話が進んでいる。

「チャレンジだ、と思う。『前へ』、の精神で」

ゼミ長の北川が言った。彼は行動の人だ。『走ったあとに、考える』タイプだ。

「それに、400万の調査費も出るってことですからあー」  
会計係の福山がぶちあげた。

「先生も入れて、一人頭50万ですよ。断る手はないっちゃ」

福山が続けた。姫野先生は静観している。学生たちの自立度を見ている。

「あのさー。S社はデータは揃っていると言ってるけど、そういうところほど、危ないんだ。仮説ありきのデータでしょ。ゴミを入れれば、ゴミしか出てこない。コンピュータから理論家の外崎がつっこみを入れる。

「あたしは、露光室がやばいんじゃないか、と目星をつけてんだけど。だってー、プリント板の心臓部でしょ。そこよ！」

立花マリーがあてずっぽうの推量を飛ばした。紅一点だ。

「その根拠は？　女性の第六感かよ？」

鈴木がチャチャを入れた。彼はでしゃばりが大嫌いだ。特に、きれいな女にはなぜか冷たい。コンプレックスの裏返しかもしれない。

「あらー。ひどい。目に見えないくらいのチリやほこりがくつつくのよ。基板に。そうすると、そこが断線するに決まってるんじゃない。私よりチビなくせにいー」

マリーが反撃した。

「まあ、マリーが言うようにチリやほこりが原因としたら、分析はどうしますか？　多変

量解析といえ、林の数量化I類あたりがいいのでは？」

データ係の西野が言った。林の数量化I類は、確かに予測には向いている。彼はマリーと鈴木の不仲をソフトランディングさせようと、気を使って、水を向けた。西野は二浪して入った年長者だ。誰もが一目置いている。

姫野先生がついに喋った。

「みんな、ありがとう。なかなか素敵な意見だった。多分、プリント板の穴の口径、穴の数、ピンとピンの間の長さ、チリやほこりの大きさ、埃がまわらない程度の湿度とかが相互に関連している、と想う。とりあえず、こういうルースな仮定から始めようじゃないか……あとは現場を見て、そこそこの理論を作っていこう。暫定的に、統計は何で測りますか？皆さん」

「変数六つを扱う対数線型モデルでは、どうです？ 先生」

鈴木が主張した。

「原因を追究するには、そのモデルはいいかも？ でも、ログリズムは小さな値が不当に大きく扱われることがある。そこが欠点だ。問題あるよー」

外崎が指摘した。

「まあまあ。パーフェクトなりサーチはありません。みんな一長一短あります。それぞれのツールには」

先生が答えた。

「それではゼミ長の北川君、最後のしめを」

「この研究は、来年学会で発表するつもりです。えらい先生もいっぱい来て、鋭い批判が入りますから。皆さん、覚悟して」

北川が提案した。

「やだー。あたしい。本試合での登板めざして練習に忙しいから、勉強はみんなの半分か四分の一くらいにしてほしいわー」

マリーが苦情を言った。

「だめー」

ほぼ全員が声を揃えていった。

「勉強の方もノックアウトかよ。神宮だけかと思ったら」

鈴木が皮肉った。マリーの目がひきつった。それを見て、北川がすかさず、こう言った。

「いいよ。おれがマリーの肩代わりをするから。いつも英語の勉強助けてもらってるから」

「おー。マリー・ミー（私と結婚して）」

と、北川に軽くウインクした。

## 白と黒

ゆらーり

ゆらーり

二つの影が動いている。中年男と若いチャイナ娘だ。

鶴の舞い

へびの形

一重のむち

雲の手

機織りの型

二人の動きが止まった。まだ動かない。残心のかたちをとっているのだ。二人が舞っているのは、太極拳だ。男は姫野一男。娘は楊梨花。彼女は楊家太極拳十二世宗家の孫で、十三世を引き継ぐことになっている。ここはM大と「山の上ホテル」の間にはさまれた錦華公園の中だ。梨花は、近くのK立女子大学で中国語の非常勤講師をしている。

「一男さん。なかなかお上手よ」

梨花が褒めた。

「師匠の動きにはなかなかできません。どこかが必ず動いてますよね。指の先とか」

姫野が答えた。

「そろそろ昇段しましょうか？ 次の私の質問に答えられたら、指導員です。太極拳のころは？」

「自然とともに動く。ゆるやか、おおらか。心も」

「うーん。七十点。合格です。審査料は二万円。印可の言葉をのべなさいっ」

「長江（揚子江）の流れのように。才色兼備さん」

「うふふ。嬉しい。一万円にしとく。特別よっ」

梨花は148センチしかない。が、みどりの黒髪をもつ美女だ。しなやかな柳のような軽やかさがある。彼女の動きは、格別だ。さすが中国二千年の香りと光をもつ。家元の自信からくるものかもしれない。

梨花と姫野の出会いは、こうだ。姫野は中国伝統の「易経」という占いの中に、統計の手法を見出したのだ。この仮説を京都の学会で発表した。この時に、中国語の先生である楊梨花が聞きに来ていたという訳だ。これ以来、この二人は師匠（梨花）と弟子（姫野）という関係になった。姫野は「本物」から学びたかったのだ。だから、家元の直弟子にし

でもらった。姫野の太極拳への興味は古い。ロンドン大学で教えていたとき、空手仲間のマークが中国拳法に転身したことに始まる。空手は若いときにしかできないが、太極拳は一生楽しめるという話に乗ったのだ。マークのゆるやかな動きを見て、一目で気に入った。だが、勉強と研究に忙しくて、のびのびにしていた興味が、このところ花が開いた。帰国して、梨花と知り合ったことが、開花のきっかけだった。梨花は姫野の中に光を見た。姫野一男からうすい緑色のオーラが出ている。これで弟子にとってもいいと感じた。(伸びる。本物だ。五番弟子にしてもいいわ) 梨花の生徒は五人しかいない。選ばれた人しか、とらない。

陰と陽

白と黒

動と静

月と日

質と量

このことが分かる人しか、とらない。これは、太極拳の極意に通じるものがある、と梨花は察している。

「梨花さん。来週会うまで時計を交換しませんか？」

「あら。恋人みたいね。ふふ」

梨花は腕時計をはずして、姫野へ渡した。

「うへー。ロレックスですかあ？」

「家元としての品格がいるでしょ」

姫野はおおずと自分の時計を差し出した。

「ふうーん。オメガ？ オメガを持つ男は信用できるって、昔から言うわよね」

「でへへ。梨花さんと共鳴したかったもんで……」

「いいわよっ。あたしも一男さんのこと、好きだから！」

「おそれいます」

「仲間ということ、ねっ」

娘は南へ、中年男は北へと向かった。スコットランドの風が吹いた。初夏に、ときおり、異例のさわやかな冷風が朝夕おきることがある。姫野はこれを「スコットランドの風」と呼んでいる。そこを旅したときの匂いとしめやかさを読み取るからだ。中国の華(梨花)は、涼風だ。

(インゲン、南京豆、チンゲン菜、どれも中国生れ。おれの好物だ)

姫野は思った。

そのとき、「あたいは高嶺の花よ」と、梨花が返事した気がした。

姫野五十五歳。梨花三十三才。

## スピン

野球好きの吉田が立花マリーを呼び出した。神田須田町にある、古民家風のカフェだ。タンゴの曲が、ひかえめに、軽やかに流れている。マリーがドアから吉田の席へ歩くまでに客の目が釘付けになった。それ程、彼女は目立つのだ。176センチの長身、スレンダーの美しいボディ、ゆるやかなウェーブをまとった赤い髪、青い目。英国人顔。どれをとっても一級品だ。

「吉田君、なあーに。突然呼び出したりして。講義の合間だから、いいけど」

「まあ。座れよ。たまにはおれとつきあえよ」

「ふうーん」

「あのさ。ちょっと見てほしいものがあるんだ」

と、吉田は言いながら、タブレット端末を取り出した。

「これ。マリーが去年、神宮で投げたときのビデオ。これを、おれが作ったソフトにかけてみた。ほら、見て。球の回転軸とスピン数が計算されて、出てくる。ここだ」

「へー。やるじゃん。吉田君」

「まあまあ。面白いのは、ここからだ。まず、軸。これは左へ8度ずれている。まっすぐ立つのが正しいのだが。このとき、球がバッター前で4度おじぎをしているよね」

「へー。数値ででるんだ」

「軸がずれてるから、直球でスピン数は1500回。これじゃ打たれても当然だ」

「じゃあ、どうすればいいのよ?」

「あのさ。メジャーリーグで、マリーと同じサウスポーで歴代屈指のピッチャーといえ  
ば?」

「ランディ・ジョンソン」

「正解。そのランディ・ジョンソンをお手本にして、マリーの投げ方を作ってみた。見て」

「マリーが左の横手から、スピンのきいた、小気味良い直球を投げた」

「うあー。このマリーはだれ? 私に似てるけど……」

「へへ。マリーのAIなんだ。おれが作った」

「それで結果は?」

「軸はまっすぐ立って、回転数は2000に上昇。スピードも5キロ増した。これだと速

球と言えるかもしれない。マリーにとってはね」

「す、す、す、素敵じゃない」

「これを実技でやれるかい？」

「もちろん」

マリーが上半身をごそごそし始めた。そして、うすいピンクの物を吉田に差し出した。

「おおれ。そんな趣味ないんだけど……」

吉田はマリーのブラを手渡されて、どきまぎしている。

「あたいの感謝の印。いま、何もあげる物がないの。これが私の気持ち。好きでしょ、ブラ？」

「えええ。うれしいけど、気持ちは……」

「ふふ。実は、そのブラしていると、なげにくいのよ。そこで『頭で野球をする』のを、提案してくれた吉田君なら、ブラも改良できるかなって、おもって」

「そ、そ、そかあ。なら、もらっとく」

大事そうに、吉田はバッグの中へしまい込んだ。回りの男性たちがうらやましそうな目で吉田を見た。

「たまには、なめてもいいわよ、それ。吉田君」

吉田はみるみる赤くなった。

## 軌跡

ビューン

ここは弓道場だ。鈴木が弓を引いている。その隣で長身の美女がいる。マリーだ。マリーも弓を引いている。

一本目、的に当たった。

二本目も的に当たった。

三本目はど真ん中を射貫いた。

鈴木がマリーを弓道に誘ったのだ。実は、副ゼミ長の吉田から電話があった。弓道の中から、野球にヒントを捜しだしてやってくれないかと、マリーに。

このとき、弓道部の指導員の小川先生が近づいてきた。

「あの一。野球部の立花マリーさんですよ。神宮で見ました。この部の世話をやいている、小川です」

「あ、はい。突然おじゃまして、すみません。あと、二、三本打ったらすぐ帰りますから。」

部員の皆さん、初心者の私にやさしくしてくれて……」

「いやいや。マリーさん。弓道部に入りませんか？ 野球をやめて。才能があります。すぐ正選手になれますよ。私が太鼓判を押します」

「え？ 困りますわー。ありがたいお言葉ですが……」

「何なら、鈴本の代わりに、すぐにでも試合に出れますよ」

「小川先生、それはないでしょ。おれは五年もやっていますよ、弓道を」

鈴本が不満をこぼした。

「いやー、こういうものは年数じゃない。もってるか、もってないかの差だ。マリーさんはもってる。才能と気品が」

「先生は女には甘いんだから……」

「先生。鈴本君は才能がおありですよ。教え方がとてもお上手です。私にはとっても分かりやすかったです」

「そうか。そうか。マネージャーとしての才能ありか。あはは」

「ちえっ。実技者じゃなくて、裏方かよ。わ・か・り・ま・し・た・あ」

鈴本はマリーを道場の離れに連れて行って、こう話し始めた。

「どう？ 野球にヒントになるようなこと、分かった？」

「うん。いい経験だった。ゆるゆる引いて、さっと離すのね。これは投球術に近いわ。ゆっくりゆっくり、さっ。これね?!」

「武道が役に立つなんて、思いもつかなかった。吉田から電話をもらうまで」

「鈴本君から連絡があったとき、おどろいちゃった。あんま、仲良くしてないから……」

「おれも。吉田から連絡があったとき、こんなことを言うんだ。二人の間には、重大な共通点があるんだと。マリーはマリア様から名前が来ていて、おれは鈴本光で、ひかりは仏様の別名だ、と言うんだ。世界の二大聖人どおしだから、大きな心でマリーを助ける、と」

「ふうーん。ちょっと強引なこじつけじゃなくって？」

「おれもそう感じたけど、吉田の気持ちは通じた。頭で野球をやって、マリーをマウンドに立たせたいってね」

「ふうーん。なんまいだー、なんまいだあ」

「茶化すなよ。はい、これ」

鈴本は一個のグローブをマリーに差し出した。

「え？ くれるの？ いくら仏様でも、そこまでしなくっても……」

「グローブに何か書いてあるだろ？ 読めるかい？ 書きなぐってあるけど」

「ジ、ジョンソン…ラ、ラ、ランディ??？」



「そう。ランディ・ジョンソンのサイン入りグローブ！」

「すごいじゃない。ど、どうしたのよ、これ？」

「おれの兄ちゃんが通訳ガイドをしててね。ランディ・ジョンソンがきたとき。一週間、彼の面倒をみたのさ。そのお礼として、このグローブをくれた。この前、ネットオークションで調べたら、十萬円の値がついてた。実際に試合で使ってたやつなら、五十萬円だって……」

「いいの？」

「いいよ。もってけ、ドロボー。兄ちゃんもってるより、マリーが使った方が、そのグローブだって、うれしいだろ」

「ふうーん。ご利益があるといいなあ」

「あるよ」

「あのさ。うちの妹とデートしてやってくれない？」

「お返して、意味かい？」

「まあ、そんなとこ。N本女子大学の一年生。この前ボーイフレンドがほしいって、言ったから。アマンダって、名前よ。なぎなた、やってるから、武道をやってる鈴木君とは話が合うかも？お膳立ては、あたいがやるから、あとは鈴木君の腕しだい。どう？」

「美人かい？」

「あらー。ひどい。女を見かけで選ぶわけ？ふふ。私より美人よっ」

「ひくーひくー」

「ひくなよっ。男でしょ」

「イエス。マリア様」

## 悟り

一本歯のゲタをはいて、山道を登っている男がいる。姫野一男だ。なぜ、このゲタかって？ 体幹を鍛えるために、この風変わりなゲタをはいている。昔、修験者が使っていたと言い伝えがある。楊梨花から勧められたのだ。太極拳の舞いのしなやかさは、これから生まれると。

ここは、そう山奥。滋賀にある石馬寺だ。聖徳太子が開いたという伝説がある。お堂からお経が聞こえてくる。

「かんじざいぼさつ……しきふいくう くうふいしき……ぎやてい はらぎやてい はらそうぎやてい……」

お経を唱えているのは、南不庵。姫野のもと教え子だ。姫野は月一回、ここに座禅に来る。座禅というよりも、南の顔を見に来るのだ。それだけで、心がなごむ。

「やあ、先生。いらっしやい。お抹茶でも飲みますか」

「お、いいね。元気そうや」

二人は縁側に座った。緑の木立ともれびがごちそうだ。

「どうです。先生。リサーチうまくいってますか？」

南が聞いた。

「うん。まあまあや。答が出たり、入ったりする」

「先生はイギリスで高等教育を受けたから、何でも論理と言葉にしようとする。いけませんねー」

「そやな。ロジックと数学で解けないのも、ある。そこが悩みや」

「先生。感性ですよ。感じるか、感じないか」

「ほんま。教え子からおしえられるわー。君は勉強はできんかったけどなあ。あはは」

「いえいえ。私が仏教大学に編入するときは、模擬面接の練習とか、英語では随分と助けてもらいました」

「あの南君が、いまや、住職さんや。なんまいだあ。わからへん」

「今日は、また、何を？」

「そや。相談があるんや。うちのゼミ生で、立花マリーというのがある。万年控え投手や。これを神宮球場で一人立ちできるようにしてやりたい。その開口を捜してる。見つからん」  
「先生の得意は太極拳でしたよね。脱力することに重きを置く。そこにヒントが眠っているんじゃないですか？　ここで、その舞いを見せてください」

姫野の中国拳法が始まった。

ゆらり　ゆらり

馬のたてがみをなでる形

……

蹬脚

……

雲の手

旋風脚

……

ぬき手

収勢

「いやー。すばらしい動きでした。先生、やりますねえ。鴨川の流れのように、みやびやか。名人じゃないですかあ」

「いやー。そこまでは」

「右脚でける前に、左脚で地面をパンと踏みますよね。これを使えませんか？」

「ああ。どんじゃお、かい？ あれをやると、ケリが自然に出るんだよ」

「それです。ちからを抜くと、ちからが出る。いわゆる逆説の真理です」

「それを投球に応用せよ、と」

「先生の故郷、大分が生み出した偉大なピッチャーといえば？」

「神さま、仏さまの稲尾かい？ あの鉄腕四十二勝の？」

「ごめいさつ。先生」

「君は若いのに、よく知ってたね。稲尾を」

「ぼくの両親は鹿児島出身で、九州の野球には詳しいんで」

「で？」

「おやじがよく言っていました。稲尾の投げ方は理に合ってるって」

「もつと詳しく」

「稲尾が投げるとき、右足のつま先で立って、それをドスンと落として、勢いをつけてボールを放るって。おやじの受け売りですが」

「それだと、非力な女子でも使えるか」

「それに、打者のタイミングもずらせますよ、きつと」

南は一呼吸おいて、尋ねた。

「先生。座禅やっついていきますか？」

「おう。そうしよう。今日もいい日和だ」

「おこころもいい日よりにしましょう」

……

「かんじがいぼーさつ……ぼーじーそわか」

シュート

キューン

ズバツ

（なかなかいい球を投げる。切れのある、生きた球だ）

受けている第三捕手の足立は、そう思った。マリーが投げている。左の横手からくり出

す球は伸びがある。フォームを変えてから、別世界の人のようだ。マリーはゆるゆると体を動かして、ピュッと腕を振る。しかもつま先立ちから、かかと落としの変則で足を踏む。マリーの売りは、落差の大きいカーブだ。これは一級品だ。コントロール良く決まれば。そのとき、マリーの球は、意外な道筋を示した。シュートだ。後ろで投球を見ていた古屋投手コーチが思わず、つぶやいた。

「え？いけるじゃん。この玉。マリー、すまん。もう一球その玉を放ってくれ」

「はい。よろこんで」

シュート

左打者の内角低めに決まった。ストライク。

「よし！マリー。今度の紅白練習試合で登板させよう。一軍で通用するかテストだ。新しいフォームとシュートが生きるかどうか。監督にはおれから話しておく」

「はい！おねがいます」

帽子をとったマリーのポニーテイルが揺れた。

話はこうだ。一週間前、ゼミの集まりの後、外崎から誘われた。

「ちよつとこのカフェでお茶しないか？ マリー」

「わー。あたし、人気者。みんなからひっぱりだこ」

「お前の容姿じゃ、そうだろうよ。いいから、来いよ」

「ま、えばっちゃって。男気ぶんぶん。ま、つきあわないでもないわ」

二人は角にある今風のカフェの一席に落ち着いた。店内はM大生で溢れている。パソコン相手にパシャパシャ打っている人。本を片手にコーヒーを傾けている人。ケータイをいじくっている人。さまざまだ。

「さてと。まず、マリーにはこの本を進呈しよう」

外崎は一冊の本をマリーに差し出した。その本には『サルでもできるシュートの投げ方』と書いてある。

「あたし、サルじゃないから！？」

マリーが文句を言った。

「いやいや。そういう訳じゃない。超簡単なシュートの投げ方なんだ。まあ、見てくれ、ここ」

外崎はページをめくった。ヤクルトスワローズの石川雅規投手のシュートのにぎり方。大リーグのランディ・ジョンソンのシュートの握り方まで書いてある。石川投手は小柄な左腕で現役最多勝利数をあげている。シュートを、その武器の一つとしている。

「まっ。石川投手とランディ・ジョンソンのツーシームまであるわ。参考になるわねー」

「おれはね。マリーが神宮球場で笑う姿が見たいのさ。カーブとシュート。この二つが揃えばかなりいけるんじゃない」

「ありがと。このところ、みんな私に優しいのね。なぜかしら…」

「実はね、この前、姫野先生から話があったね。『頭でする野球』をプロジェクト風に考えているんだって。みんな、それぞれ個性を生かして、マリーを助けてよ、って」

「へー。そうなんだ。だからカーブ」

「シュートは、その本で覚えられると思う。次は、おれの理論を言ってもいいか？」

「ファイアー・アウェイ（どんどん言ってる）」

「投球は制球力で決まる。いくらいい球種をもっているても」

「で、コントロールをつけるためにはあ〜？」

「走り込みと遠投。ここまでは常識だね。もう一つ秘密の練習法があるのさ」

「え、どんなあ？」

「一本歯のたけの短い下駄をはいて、体幹を鍛える」

「古武術？」

「おれがやっている合気道での昔からの練習法なのさ。重心の移動をスムーズにやる。体幹のずれをなくす。これに尽きる」

「で、外崎くん、合気道は何段？」

「初段」

「まだ、初段……」

「おれが二級で困っているとき、このゲタで急激にうまくなって段位がとれた。習うより慣れよ。疑うより、まずやってみることさ」

「へー。外崎君の折り紙付きって、ことね」

「姫野先生も太極拳の稽古に、これをとり入れてるって、聞いてるぜ」

「じゃ、信じる」

「いつも先生のことを、裏でチビ・デブ・ハゲって言うたくせに」

「ごめん。今はあたしの『あしながおじさん』って、とこかしら。足は短いけど」

「あはは。『赤毛のアン』が言ってる」

「あたしは、アンほどがんばりやさんじゃない」

「だな。女はおんなだ」

「どういこと?!」

「おれの持論を言ってもいいかい？」

「とまらないでしょ。理論家として」

「マリーがどんな素晴らしいシュートを投げたって、女だぜ」

「だから？」

「マリーは女として、勝負すべきだと思う。バッターと」

「わかったわよ。女、女って、うるさいわねっ」

「ミニスカートをはいて、上着はシースルーで肌を露出させなよ」

「ズボンじゃなくて？」

「そう。できたら、可愛い下着をつけて」

「色気で勝負しろって、いうのね」

「そう。男は可愛い女の子と勝負なんかしたくない。女は守ってあげたい。叩くのではない。叩くのではな

くて」

「ふうーん。外崎くんの生物本能論ね」

「だって、考えてもみろよ。ミニスカートできれいな足の女の子が、胸のふくよかやを感じさせて、しなやかな体でゆるいボールを投げてきたら……本気で打ちづらいだろ。つい甘甘になっちゃう。外野スタンドに入るホームランも、普通の外野フライになっちゃう」

「女を逆手にとれて、ことね」

「マリーの美貌は六大学一だよ。少なくともスポーツ部ではね」

「ふふ。うれしい。少なくともその部分はいらないけどねっ」

「ミニスカとシースルーの服は、妹のアマンダと相談して、作ってみる。N本女子大で服飾のデザインやってるから」

「そりゃあ、名案だ。もちはもちやに」

「あたいの方が餅肌なんだから、アマンダより」

「アホか、お前」

左手の中指と薬指の間からぬいたシュートが決まった。

「100点。マリー」

古屋投手コーチが大声で言った。マリーの帽子は変わっている。おもちゃの帽子が髪留めのバレット風にさしてある。

「マリー。おしゃれ、その帽子」

古屋コーチが褒めた。

「おフランス製さまっすっ」

マリーが余裕をもって、ちよっとぼけてみせた。

イヤリング

白板に数式が書きなぐっている。机の上には、ボルトやナット、はんだごて、おまけに顕微鏡まである。ここは東京R科大の実験室だ。鳥飼はここで物理学の准教授をしている。姫野が中3のときの同級生だ。英語は姫野が一番、数学は鳥飼が一番だった。

どんどん。

「おー来たか。入れ。できちよるぞ」

「なんや。ここ。ごみ屋敷やないか。鳥飼」

「おれにとっちゃ、お宝の山や。姫野」

「個人の見解のちがいや。見せろよ、ブツを」

「これや。ようできちよるやろ」

「へー。イヤリングか。可愛いいう。ピンクで」

「これを耳につければ、骨伝導で伝わる。その人だけに」

「マリーはいいとして、捕手の分は？」

「チョー小型の補聴器風に作ってみた。これだと不自然に見えないだろ。キャッチャーだつて」

「まあまあのできや。鳥飼。9点」

「えらい、かれーの。ところでお前のデータの方は大丈夫なんか？」

「太鼓判。何しろ六大学の打者全員を分析した。そのデータがこのケータイに入ってる」

「ちよつと動かして見せてくれよ、姫野」

「オーキー・ドッキー。W大4番の宇佐美。第1球外角低め速球は、見送りボール。2球目の内角高めシュートは、ファウル。第3球目は、真ん中やや低めにスライダーで、ライトフライでアウト。その確率は6割4分5厘」

「へー。よくできてるじゃん、姫野。で、統計は何を使った？」

「判別分析だ」

「おー、いい線いってるじゃん。あの、的にヒットするか、はずれるかの関数か？」

「だね。だね。数学者のお前から、合格点をもらえるか？」

「かぼす」

「何や、それ???. 大分の名産かつ」

「かんぺき ぼうだい すつきり」

「お前のしゃれは、相変わらず、おもしろいいう。鳥飼」

「コーチ陣は納得しとるのか、そのシステム？」

「古屋投手コーチは使ってくれるって、試しに。マリーと捕手に、これで指示してみるって。統計の予測を使うか、使わないかは、バッテリーにまかせるって」

「ま、そんなところだろうよ。『権利自由』のモットーに合ってるじゃない、M大の」  
「で、これがごほうび」

姫野はラフロイグのウイスキーびんを、どんとテーブルの上に置いた。

「ほっ。シングルモルトの十五年もの。スコットランドのほまれかあー。さすが、英国からの洋行帰り」

「おれの元カノは、その醸造所の社長の娘だったって、知ってるか？」

「どうせ、ふられたんだろ。身分ちがい。大分の乾物屋の息子とじゃ」

「みそと干物が嫌いだって。そのイギリス女！」

「文化の差は、数学ではとけないって。あはは」

「諸行無常の響きあり。平家の心境さ。栄枯盛衰」

「よっ。哲学者。姫野」

## ミュージック

パラン パラン

ジャラーン

ポロポロン

不思議な音が聞こえてくる。これは中世宮廷音楽だ。

レベック (バイオリンの原型)

ヴィオラ・ダ・ガンバ (ヴィオラの原型)

チェンバロ (ピアノの元)

ヴィオロンチェロ・ピッコロ (チェロの元)

ビウエラ (ギターの起源)

つまり、弦楽五重奏という訳だ。それに中世フランス語の歌がつく。四百年前の西洋クラシックの再現だ。赤毛のマリーが歌っている。レベックを弾きながら。ビウエラを担当するのは、短足の姫野。ここは田舎。別府のとなり、日出町だ。中世音楽の好きな人たちが月一回集まって、楽しんでいるのだ。ヴィオラは近くの中山香に住む仲間さん。これらの楽器の製作者でもある。チェンバロは、仲間さんの妹優香さんがリードする。ヴィオロンチェロは、大分大学で講師をしている指原ミカさんが奏でている。地方のインテリの集まり、といえる。東京から姫野とマリーは遠路はるばる参加している。なぜかって？



姫野は数年前、地元大分の英雄（大友宗麟）の小説を書いて、そこそ売れた。だから、お金には、ちょっと余裕がある。マリーは大分から奨学金をもらっている。返済しなくてもいい。ただし、卒業したら、一年だけ大分で就職するという条件がついている。マリーは、大分の高校で先生でもしようと思っている。彼女はバイオリンとフランス語は小さい時からやっている。この役にはうってつけだ。姫野は中世音楽にひたると、落ち着く。平和な気分になれるのだ。太極拳と同じ効果があるのかもしれない。マリーは大分の田舎が好きだ。なんだか南欧ののびやかやを肌で感じるのだ。彼女のひいおじいちゃんの奥さんはスペイン人だったとか、聞いたことがある。

「マリーさん、どうです、野球の方は？ 神宮はなつかしいなあ……」

仲間が聞いた。仲間は六大学のH大の出身だ。

「まあまあです。去年の秋はH大にめった打ちにされましたけど……あはは」

マリーが笑って答えた。

「いや。このところ、マリーは青虫から蝶に変身しました。いいボールを投げます。今年の秋はきつと活躍します」

姫野先生がフォロローに入った。

「そうですね。マリーさん。野球も音楽と同じ。リズムよ」

指原ミカが続いた。

「そういえば、お兄ちゃんの先輩で六大学で最多勝をあげた名投手がいたんじゃないかって」  
優香が尋ねた。

「佐伯鶴城出身の山中正竹さんだ。小さな体だったが、左から切れのいい変化球をなげたな。H大の全盛時代だ」

「マリーさんと同じサウスポーって、訳なのね。背はマリーさんの方がアドバンテージがあるじゃない。角度がつかだけ得じゃなくなってる」

指原ミカが応援した。

「でも、球はゆるゆる、のったり、ゆったり、なの。困っちゃう」

「マリーさん、ボールは速ければいいってもんじゃないわ。遅い玉を早く見せる工夫はないのかしら？」

優香が素朴な質問を投げかけた。

「あ、それは多分球のスピンドだと思います。その点は、多少、解決しました。サイドスローにすることで。そうだろ、マリー」

姫野が、マリーの代わりに、答えた。

「そこそこ、いけます。先生」

「あのー。素人でごめんなさい。途中でボールの握りを変えられないかしら。バッターの構えを見て。外角を狙っていると見えたら、シュートで。内角を狙っていると見えたら、カーブで。ピアノで長調から短調へ代えるように……」

指原ミカが提案した。

「おー。それはエウレカ（ひらめき）です」  
仲間が叫んだ。

「お前はアルキメデスか!？」  
妹の優香がつっこみを入れた。

「え。でも。すっごい、いいアイデアですね。ミカ先生。さすがインテリ!やってみようかしら」

マリーは革新で前衛派だ。どんどん新しいことをとり入れようとする。

「お。じゃあ、ひらめいたついでに、かれいにしますか。城下かれい。今晚」

姫野がおどけた。城下かれいは日出町の名産だ。城下に出る真水と堀まで入ってくる海水が混じって、絶妙な味のかれいが育つのだ。

「おやじギャグですかー。あたしの短足おじさまっ」

マリーがすかさず反応した。

## 図書室

ゼミ長の北川と会計の福山がタブレットPCをいじくっている。その隣に、赤毛のマリーが座っている。三人でひそひそと喋っている。ここはM大図書館の中にある自習室だ。まず、北川が切り出した。

「マリー。前から速い球を投げたいって、言ってただろ。秘密を見つけた。聞きたい？」

「うん♡」

「あれこれ速球派のピッチャーをビデオで観た。江夏、江川、松坂、ダルビッシュ、田中マリー君……」

「結論から言ってくれない? 話が長くなりそうだから……」

マリーが話の腰を折った。

「おう。一足分、前に出す。これで決まりだ。球速が5キロはアップする」

「あら。簡単じゃない。できそう」

「速球投手と遅い投手の差は、歩幅が違うんだよ。マリーの場合は約30センチ、右足を前へ踏み出して、投げる」

「統計はちゃんと使ったんでしょね。科学的に」

「姫野先生から習った、T検定を使った。100分の5の確率で有意義と出た」

「じゃあ、20回に1回は失投がある、という計算になるわね?でも、合格!北川君」

「次は、福山の方から話がある。マリー」

「え?聞きたいいー」

福山が話し始めた。

「スピードがつけば、次はコントロールの問題だ。それで、技巧派ピッチャーを分析してみた。データはグレッグ・マダックス(元プレーブス・カブス)、リユ・ヒョンジン(ドジャース・韓国人)とかが入ってる。制御力の決め手は、プレートの位置を変えることだったのさ。打者のくせと球種によって、プレートの真ん中、右と左と巧妙に踏み変えてる」

「すごい投手ばっかじゃない。信用性が高いわね」

福山もまんざらそうだ。

「やってみる?マリー」

福山が尋ねた。

「あんなたち、頭がいいのねっ!」

「ルックスって、言ってほしいね」

北川が反撃した。

「北川君はね!あたしの好み」

「ちえっ、北川には甘いんだから……」

福山がぐちった。まわりの学生たちから「シート!」という声が出た。三人は黙って頭を下げた。福山が続けた。

「おれはもう一つ、良い提案があったんだけど、やめようかな?」

「福山君は手が素敵。指先が長くて、きれいっ」

マリーが機嫌を直しにかかった。

「ほめる所が間違ってる!ま、いいや」

「ねえ、お願い。続けて……」

マリーは軽く、福山の手の上に、手をのせた。

「この本を見て。江夏豊が書いたんだ。ここに、書いてある。寝っ転がって、ボールを天井に向かった投げたって。これで驚く程コントロールが良くなったって」

「へー。そんなこと?……?」

マリーが不思議がっている。

「しかけは、まだあるのさ。ストライクゾーンを九つに区切った紙を天井に貼ってあるのさ。そこに向かって、天井につくぎりぎりの所で止める」

「ふーん。おもしろそう」

北川が言った。

「肘と手首のやわらかさを出すためだったのね、きつとマリーが類推した。」

「答は意外なところにあるのね。勉強になるわー」  
マリーが感心している。

「勉強がちつともできない人が感心している。あはは」

福山が皮肉った。

「英語とフランス語は、あたいの方が上だからねっ!!」

「だって、あんた。半分外人じゃね」

福山は、まだ、ごねている。北川が助け舟を出した。

「まあまあまあ。マリーはM大きっの美人だし、福山は湘南のジェントルマンで、数字に強い。おれは、その上を行く博学多才。がはは」

「んざけんなっ!!」

二人の声が揃った。まわりから、また「シーツツ」と叱られた。三人は、こそこそと、図書室を抜け出した。

えせ

二人が舞っている。ゆるやかな、まったりとした動き。そう。太極拳だ。

雲の手（雲を払いのけるように攻撃を避ける）

はた織り（片腕の受けともう一方の手で突き）

蛇の形（体を低くしてからの蹴り）

……

動きが止まった。楊梨花が言った。

「一男さん。いいわね。心に余裕があるみたい。楽しんでやってるのが伝わってくるう」

「そうですかー。でへへ。ドクターになっちゃった」

「えー。すごい。どこでもらったの?」

「ニューカンタベリー大学」

「聞いたことないわよっ。それに最近留学してないじゃない。通信?」

「ううん。買っちゃったんだ。ネットで」

「まあ、うそこの博士号なのね。いくら?」

「四十二万七千円。略歴と簡単な作文だけで、くれちゃった。ドクター」

「だめよ、そんなの。誰にも言わないで、私だけにとめておきなさい。恥かいちゃうわよ」

「でも、博士の認定書つきだよ。大学の事務にだしちゃった、もう」

「えー。すぐに撤回しなさい。教授会でもめるわよ、にせ博士じゃないかって」

「そうかなあー」

「あら、あたしの大学にも一人いたのよ、去年。東大の学部しかでてないから、その人どうしても修士がほしかったのよね。アメリカのえせ大学から買ったって、ばれちゃってひと悶着あったのよ。結局、彼女、その称号をとりさげちゃったけど……」

「そ、そうなんだ」

「ね、ね。その博士号の証書は、一男が亡くなったとき、棺の中に入れてあげるから、あっちの世界でえぱりなさい」

「えー。こっちの世界でもいばりたいっ」

「じゃ、あたしはドクター姫野って、呼んであげるから……」

「この話はお釈迦かよ?」

「お上手!」

梨花がつづけた。

「ところで、あなたの学生さんで気にしてたマリーさん。ほら、神宮で活躍したがってるっという投手見習いさん」

「え、どうしました?」

「あたしから助言があるの」

「どんな?」

「捕手から球を受け取ったら、間髪入れずに、すぐ投げてっ」

「その意味は?」

「自分のタイミングで投げる。打者のタイミングに合わせない。考えさせない。感じるのよ」

「ふふーん。太極拳と同じですね。考えるな。感じるって」

「ご名答。ドクター」

「宗家からの言葉は重みがありますね。マリーに伝えときます」

「あら、もう一つ助言があります」

「なんででしょう?」

「あたしをもらってくださいさらない、一男さん?」

「えー。まじかっ」

キラキラ

神宮の六大学野球が盛り上がりを見せている。M大は名門K大を相手にしている。3対2でM大がリードしている。が、7回ツーアウト満塁で、M大はピンチ。ここで、K大は3番強打の桜井だ。左のスラッガーで、六大学屈指の長距離砲だ。

ここでM大の釘宮監督が動いた。投手交代だ。右のエース小松からサウスポーターにスイッチだ。M大は大ばくちに出た。ミニスカートと肩から上がシースルーのユニフォームを着た美女がさっそうとマウンドに立った。観客からよどめきと驚きの声が上がった。ゆったり、まるやか、かるやかに、マリーはかまえた。古屋投手コーチから統計の数字が出た。マリーは無視した。ノーサインでいくと、首を振った。3球の投球練習後、キャッチャーからボールを受け取ると同時に、マリーはゆるゆると腕を引きながら、さっと投げた。

1球目、ど真ん中のストライク。直球。桜井はゆったりと見逃した。マリーの右足があがって、ミニスカがひるがえった。

2球目 内角高めにカーブ。桜井はファウルした。ノーボール、2ストライク。左腕の横手からボールが来た。マリーは、プレートを踏み変えている。左から右はしへ。

3球目 外角低めへスライダー。ボール。左足のつま先で立って、どしんとかかを落としながら、マリーは投げた。

4球目 外角高めへ直球。またボール。ツーボール・ツーストライク。桜井は（次が、勝負玉がくる）と思った。グリップを軽く握って、インパクトに備えた。マリーのたおやかな腕がしなった。踏み出す足が前へ伸びた。

5球目 真ん中内寄りにシュート。桜井は振った。か、か、空振りだ。三振！マリーの勝ちだ。六大学ナンバーワンの呼び声が高い桜井一郎選手を打ち取ったのだ。M大の応援席から大きな拍手がおこった。

ここでマリーは大役を果たして、マウンドを降りることになった。左打者専用のワンポイントトリーフという役だ。でも、大成功だ。立派に火消し役をつとめた。ゆっくり、かるやかに、まったりとマリーはベンチへ歩いていく。ミニスカが揺れて、下から赤いものがちらっと見えた気がする。姫野は応援スタンドで、そんな気がした。陽の光を浴びて、マリーの赤毛はキラキラと輝いている。

K大戦の前日、姫野は野球部の監督室を訪ねた。  
ドンドン

「おう。入れ」

釘宮は、えらそうに言った。

「久しぶりやのう、釘宮。元気にしちよるか？」

「まあまあや。お前こそ、どや？ 今日、また、なんや？」

姫野と釘宮は大分の高校一年の時、同級生だった。この二人はなぜか馬が合った。以来、おれ、お前の仲だ。身長差二十センチはあろうかと思われでこぼこコンビだ。

「実はな。ちょっとお前にお願いがあってな」

「何や。ひよつとして、立花マリーのことか？」

「凶星。さすが勘の釘宮ちゅうことはある」

「マリーは最近いい球をほうりよるちゅうのは、投手コーチの古屋から聞いちよるが…」

「それや。マリーをK大戦で投げさせてもらえんか？ 釘宮」

「うー！ー！ん。あかん！」

「何も、先発でやってくれなんて、言うておらん」

「中継ぎの1回だけか？ 姫野」

「ううん。一人だけや。左打者限定の」

「お前、K大の左言うたら、強打者の桜井やないか！？ 危険な賭けや」

「安全パイだけを打ってたら、お前成長はないぞ。進歩にギャンブルはつきものや」

「たしかに…しかしギャンブルすぎるやろ」

「これは革命や。女子でも技と頭で通用するちゅうのを。六大学に」

「革命か？ 姫野」

「そや。お前も九州男児やろ。見せてくりい」

「ぎゅうらしい（おおげさな）やっちゃのう」

「それにな、対桜井の戦い方は、もう考えちよるけん。マリーの球種、配球、コースと桜井をパソコンでシミュレーションさせて、4球目で仕留めるちゅう予測も出た」

「そりゃあ、あくまでAIだろ。実戦は違うぞ、姫野」

「そこが、お前の度胸や。釘宮」

「やってみようかのう。姫野にたのまれちゃあ。一肌ぬぐかつ」

「おう！ お前の4番打者、羽田は、おれの統計学をとってる。赤点ぎりぎりの超低空飛

行だけど、色をつけとく。まあ、お礼だ」

「助かる。姫野」

「マリーはきれっきれの玉を投げるぞ。明日」

「お前の頭は、つるつつるや」

「あはは」

「がはは」

### 十年後

「32番さーん。どうぞ」

貫禄のある男が小学校一年生くらいの女の子の手をひいて、診察室へ入ってきた。

「どうしました、今日は？ お嬢ちゃん」

医者が聞いた。

「あー。ちよつと熱があるようで。鼻水も出てます、きのうから」

男がかわりに答えた。

「じゃあ、お嬢ちゃん。アーンして。ちつとも痛くないからねー。はい、お上手」

そのとき、側を通りかかった看護師が、二人に寄ってきて、言った。

「あらー。姫野センセ。お・ひ・さ・し・ぶ・りっ。お孫さん?!」

「マ、マリー。え？ 立花さん。むすめ、だよ!」

「ま、軽いかぜですね。のどと鼻のお薬を出しておきましょう。抗生剤もつけておきます。お大事に……」

内科医が診断した。

「ドクター。この人、日本の統計のゴッドファーザーです。ほら、MRI使うと、数字がでるじゃないですか。あれです」

「え？ あの、姫野の積分ラムダ値の?」

「それ、それ」

マリーがうれしそうに言った。

「すごいなあ。記念に、うちのMRIにサインしてもらってもいいですか？ ほかのドクターも自慢になりますから。立花さん、ご案内して」

立花マリーはM大文学部を卒業した後、K大の看護学部へ編入した。今は、ここJ恵医科大病院に勤めている。できる女として評判がいい。



「センセ。統計で賞をもらって、特許をとって、羽振りがいいって、風の噂に聞いててよ」「いやいや。名前だけが先走りしているだけですよ。マリーさんのナイチンゲールには負けます」

「まっ、お上手。お嬢さんのお名前は？」

「アン・マリー」

#### エイドリアン・奏

えいどりあん かなで

英国サリー大学からPhD（心理学博士）を取得。ロンドン大学でリサーチャーとして活躍。ロンドンの証券会社にも勤務。帰国後、日本の大学にて長年教授を勤める。太極拳の師範としても活動する。心理学や哲学など「人間の本質」に迫る作品をクリエイトすると共にユーモアと笑いを誘う著書を多く描く。「ゼネス」「田中大ちゃんがまるかじり」をAmazon（kindle版）から出版。